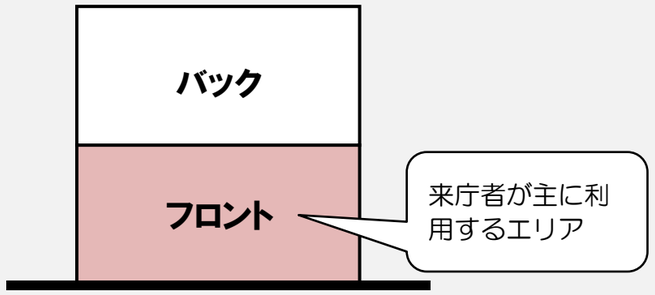
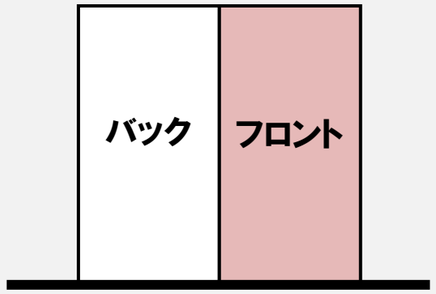
資料4

本庁業務のワンストップ性の考え方

執務室の性質を、フロントオフィスとバックオフィスに区分することにより、窓口の集約化による来庁者の利便性や、職員の業務効率性の向上などの機能性のほか、防災拠点性の向上等、基本計画に定める各機能に配慮するためのゾーニングを検討します。

区分する方法としては、①上下配置（上下のフロア間で分けるケース）、②縦割配置（同一フロア内で分けるケース）の２通りが想定されます。

		上下配置	縦割配置
断面構成イメージ			
通常時	**【利便性の視点】** 来庁者の利用のしやすさなど	**○来庁者が利用する範囲が限定されるため、ワンストップ性が高まる。** **○１フロア当たりの面積が大きくなる。** →関連部署を同一フロアに集約しやすく見通しがよい。 →フロア内動線が長くなる可能性がある。	**○来庁者が利用する範囲が限定されるため、ワンストップ性が高まる。** **○１フロア当たりの面積が小さくなる。** →上下移動が多くなる可能性はあるが、同一フロア内の動線は短い。
	【機能性の視点】 職員の業務効率性の向上など	**○本庁業務における窓口業務と内部事務を区分けし、それぞれの専門性を高めることができる。**	**○本庁業務における窓口業務と内部事務を区分けし、それぞれの専門性を高めることができる。**
非常時	**【防災拠点性の視点】** 非常時における防災拠点としての対応	**○災害発生時においては、フロントは一時避難者対応に、バックは総合防災拠点業務に迅速に対応できる。** →避難者数によっては、フロア内において一時避難スペースの細かな設定が必要 **○職員が応急・復旧に際して支援活動（救援物資の受入れ、荷捌き等）を行うために確保できるフロア当たりのフロント部の面積が大きい。**	**○災害発生時においては、フロントは一時避難者対応に、バックは総合防災拠点業務に迅速に対応できる。** →避難者数により、一時避難スペースをフロア単位でコントロール可能。 **○職員が応急・復旧に際して支援活動（救援物資の受入れ、荷捌き等）を行うために確保できるフロア当たりのフロント部の面積が小さい。**
変化への対応	**【可変性の視点】** フロントとバックの割合変化への対応	**○フロントとバックのフロア数と、その境界となるフロア内の境界位置を調整することで対応する。**	**○フロア内の境界位置を調整することでフロア毎に対応する。**